『勝義空経』について

博士課程２回生　青原令知

『勝義空経(Paramārthaśūnyatāsūtra)』は、すでに学界において多くの学者に注目され、早くからその重要性が指摘されている(1)。この経典は周知のように、『倶舎論(AKBh)』において有力な三世実有批判の教証として提示され、かたや『雑心論』では逆に三世実有説の教証とされるのを始めとして、インド仏教においては、学派を問わずなんらかの形で自説を擁護する所依経典として多くの場面で引用されている。ある意味で普遍性を持った経典といえよう。

当初『雑心論』の三世実有説に現れる教証としての『勝義空経』を中心として、学派間でのその経典の解釈の相違を追っていく予定であったが、今年に入って、すでに宮下晴輝氏によって同意趣の問題が論じられていた(2)のを知ったので、氏の成果に敬意を表しつつ、この小論では『勝義空経』に関する関係資料を整理するにとどめたい。

1

『勝義空経』に相当する経典は、現存するものとしては漢訳大蔵経の次の３種の経典のみである(3)。

(1)求那跋陀羅訳『雑阿含経』第335経（大正2 No.99 p.92c^{12}-c^{20}）

(2)瞿曇僧伽提婆訳『増一阿含経』六重品37第7経（大正2 No.125 pp.713c^{12}-714a^{10}）

(3)施護訳『仏説勝義空経』（大正15 No.655 pp.806c^{20}-807a^{20}）

サンスクリット・チベット文献には現存しないが、二次資料としてチベット大蔵経中の

(4)シャマタデーヴァ(Samathadeva)の倶舎論註Upāyikā(AKUp)

（本庄目録3[34], P.ed.Tu 155b^{3}-156a^{8}, D.ed.Ju135a^{7}-136a^{4}）

にその全文が引用される。これについては、松田和信氏によって校訂テキストと翻訳研究がなされている(4)。さらに、

(5)É.Lamotte博士によるサンスクリット還元テキスト

（"Trois Sūtra du Saṃyukta sur la vacuité", BSOAS36-2 pp.313-316）

がある。これは、回収しうる種々論書の引用断片をもとに『雑阿含』本の構成に基づいて還元されたものである。さらにそれをAKUpによって校訂したものが前掲宮下論文に掲げられている。

これらのテキストの対応を、科段に分けて次頁以下に一覧表にしてみた。便宜上、(A)サンスクリット還元本、(B)AKUp本、(C)『雑阿含』本、(D)施護訳、(E)『増一阿含』本の順で示す。なおLamotte博士のサンスクリット還元本は、当然のことながら構成が『雑阿含』本と完全に一致し、宮下氏のそれ（表では相違箇所をカッコ内に"*"で示した）はAKUp本と一致する。両者は厳密な意味でのテキストとはいえないので、あくまで参考として掲げるのみである。なお

	(A) E. Lamotte (*S. Miyashita)	(B) AKUp (Śamathadeva)
(1)	evaṃ mayā śrutam /(*om.) asmin samaye(*om.) bhagavān kuruṣu viharati kalmāṣadamye nigame /	bcom ldan ḥdas skya ba seṅ gi groṅ khyer ka lmā ṣa da mya na bshugs te /
(2)	tatra bhagavān bhikṣūn āmantrayati /	de nas bcom ldan ḥdas kyis dge sloṅ rnams la bos te/
(3)	dharmaṃ vo(*bhikṣavo) deśayiṣya ādau kalyāṇaṃ madhye kalyāṇaṃ paryavasāne kalyāṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ paripūrṇaṃ pariśuddhaṃ paryavadātaṃ brahmacaryaṃ prakāśayiṣye / yad uta paramārthaśūnyatāsūtram (*paramārthaśūnyatā nāma dharmaparyāyaḥ) / tac chṛṇuta sādhu ca suṣṭhu ca manasikuruta bhāṣiṣye /	dge sloṅ dag thog mar dge ba / bar du dge ba / tha mar dge ba / don bzaṅ po / tshig ḥbru bzaṅ po / ma ḥdres pa / yoṅs su rdsogs pa / yoṅs su byaṅ ba / tshaṅs par spyod pa / gsal bar byed pa / ḥdi lta ste / don dam pa stoṅ pa ñid ces bya baḥi chos kyi rnam graṅs bstan par bya yis de legs par ñon la yid la gzuṅ shig daṅ bśad par byaḥo //
(4)		
(5)	paramārthaśūnyatāsūtraṃ (*do.) katamam / cakṣur bhikṣava(*om.) utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati / nirudhyamānaṃ ca na kvacit saṃnicayaṃ gacchati /	don dam pa stoṅ pa ñid ces bya baḥi chos kyi rnam graṅs gaṅ zhe na / mig skye ba na gaṅ nas kyaṅ mi ḥoṅ / ḥgags pa gaṅ du mi ḥgro ste /
(6)	iti hi (*bhikṣavaś) cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchati /	dge sloṅ dag ḥdi ltar mig ni ma byuṅ ba las byuṅ shiṅ byuṅ nas kyaṅ yoṅs su ḥjigs pa ste /
(7)	asti karmāsti vipākaḥ kārakas tu nopalabhyate ya imāṃś ca skandhān nikṣipaty anyāṃś ca skandhān pratisaṃdadhāty anyatra dharmasaṃketāt /	las ni yod do / rnam par smin pa ni yod do / chos su brdar btags pa ma gtogs pa phuṅ po ḥdi ḥdor bar byed ciṅ phuṅ po gshan ñid mtshams sbyor bar byed pa po ni mi dmigs so //
(8)	evaṃ śrotraṃ ghrāṇaṃ jihvā kāyo mano vācyam / anyatra dharmasaṃketād iti /(*om.)	
(9)		
(10)	atrāyaṃ (*tatrāyaṃ) dharmasaṃketo yad utāsmin satīdaṃ bhavati / asyotpādād idam utpadyate /	de la chos su brdar btags pa ni ḥdi yin te / ḥdi lta ste / ḥdi yod pas ḥdi ḥbyuṅ / ḥdi skyes paḥi phyir ḥdi skye ste /
(11)	yad idam avidyāpratyayāḥ saṃskārāḥ / saṃskārapratyayaṃ vijñānam / yāvad(*vijñānapratyayaṃ nāmarūpam / nāmarūpapratyayaṃ ṣaḍāyatanam / ṣaḍāyatanapratyayaḥ sparśaḥ / sparśapratyayā vedanā / vedanāpratyayā tṛṣṇā / tṛṣṇāpratyayam upādānam / upādānapratyayo bhavaḥ / bhavapratyayā jātiḥ / jātipratyayaṃ jarāmaraṇaṃ śokaparidevaduḥkhadaurmanasyopāyāsāḥ saṃbhavanti /) evam asya kevalasya mahato duḥkhaskandhasyotpādo(*samudayo) bhavati /	ḥdi lta ste / ma rig paḥi rkyen gyis ḥdu byed / ḥdu byed kyi rkyen gyis rnam par śes pa / rnam par śes paḥi rkyen gyis miṅ daṅ gzugs / miṅ daṅ gzugs kyi rkyen gyis skye mched drug / skye mched drug gi rkyen gyis reg pa / reg paḥi rkyen gyis tshor pa / tshor baḥi rkyen gyis sred pa / sred paḥi rkyen gyis len pa / len paḥi rkyen gyis srid pa / srid paḥi rkyen gyis skye pa / skye baḥi rkyen gyis rga śi daṅ / mya ṅan daṅ / smre sṅags ḥdon pa daṅ / sdug bsṅal ba daṅ / yid mi bde pa daṅ / ḥkhrug pa rnam ḥbyuṅ bar ḥgyur te / de ltar na sdug bsṅal gyi phuṅ po chen po ḥdi ḥbaḥ shig ḥbyuṅ bar ḥgyur ro //
(12)	tatrāsminn (*yad utāsminn) asatīdaṃ na bhavati / asya nirodhād idaṃ nirudhyate /	ḥdi ltar ḥdi med pas ḥdi mi ḥbyuṅ / ḥdi ma skyes pas ḥdi ḥgag par ḥgyur te /

(C)雑阿含経335(求那跋陀羅)	(D) 仏説勝義空経（施護）	(E) 増一阿含経37-7（瞿曇僧伽提婆）
如是我聞。一時仏住拘留捜調牛聚落。	仏世尊。一時在倶盧数国。与苾芻衆倶	聞如是。一時仏在舎衛国祇樹給孤独園。
爾時世尊告諸比丘。	世尊告諸苾芻言。	爾時世尊告諸比丘。
我今当為汝等説法。初中後善善義善味。純一満浄梵行清白所謂第一義空経。諦聴善思。当為汝説。	諸有法門我如前説。復有正法名勝義空汝等諦聴。極善作意。今為汝説	我今当説第一最空法。汝等善思念之。
		諸比丘対曰。如是世尊。爾時諸比丘従仏受教。
云何為第一義空経。諸比丘。眼生時無有来処。滅時無有去処。	諸苾芻。此中云何名勝義空。謂眼生時而無少法有所従来。又眼滅時亦無少法離散可去。	世尊告曰。彼云何為名第一最空之法。若眼起時則起亦不見来処。滅時則滅不見滅処。
如是眼不実而生。生已尽滅。	諸苾芻其眼無実離於実法。	
有業報而無作者。此陰滅已。異陰相続。除俗数法。	以要而言。有業有報作者不可得。此蘊既終復他蘊摂。別法合集因縁所生	除仮号法因縁法。
耳鼻舌身意。亦如是説。除俗数法。	耳鼻舌身意亦復如是。	
	彼意生時而無少法有所従来。又意滅時亦無少法離散可去。諸苾芻。彼意無実離於実法亦如前説。別法合集。	
俗数法者。謂此有故彼有。此起故彼起。	此合集法無実可得。因縁所生。	云何仮号因縁。所謂是有則有。此生則生。
如無明縁行。行縁識。広説乃至。純大苦聚集起。	此縁生者。所謂無明縁行。行縁識。識縁名色。名色縁六処。六処縁触。触縁受。受縁愛。愛縁取。取縁有。有縁生生縁老死憂悲苦悩。如是即一大苦蘊生	無明縁行。行縁識。識縁名色。名色縁六入。六入縁更楽。更楽縁痛。痛縁愛。愛縁受。受縁有。有縁生生縁死。死縁愁憂苦悩。不可称計。

(13)	yad utāvidyānirodhāt saṃskāranirodhaḥ / saṃskāranirodhād vijñānanirodhaḥ / yāvad(*vijñānanirodhān nāmarūpanirodhaḥ / nāmarūpanirodhāt ṣaḍāyatananirodhaḥ / ṣaḍāyatananirodhāt sparśanirodhaḥ / sparśanirodhād vedanānirodhaḥ / vedanānirodhāt tṛṣṇānirodhaḥ / tṛṣṇānirodhād upādānanirodhaḥ / upādānanirodhād bhavanirodhaḥ / bhavanirodhāj jātinirodhaḥ / jātinirodhāj jarāmaraṇanirodhaḥ / śokaparidevaduḥkhadaurmanasyopāyāsā nirudhyante /) evam asya kevalasya mahato duḥkhaskandhasya nirodho bhavati /	ma rig pa ḥgags pas ḥdu byed ḥgags pas miṅ daṅ gzugs ḥgag / miṅ daṅ gzugs ḥgags pas skye mched drug ḥgag/ skye mched drugḥgags pas reg pa ḥgag / reg pa ḥgags pas tshor ba ḥgag / tshorba ḥgags pas sred paḥgag / sred pa ḥgags pas len pa ḥgag / len pa ḥgags pas srid pa ḥgag / srid pa ḥgags pas skye ba ḥgag / skye ba ḥgags pas rga śidaṅ / smre sṅags ḥdon pa daṅ / sdug bsṅal ba daṅ / yid mi bde ba daṅ / ḥkhrug pa rnams ḥgags par ḥgyur te / de ltar na sdug bsṅal gyi phuṅ po chen po ḥdi ḥbaḥ shig ḥgag par ḥgyur ro //
(14)		
(15)		
(16)		
(17)		
(18)	ayaṃ bhikṣava(*om.) ucyate paramārthaśūnyatā nāma dharmaparyāyaḥ /	ḥdi don dam pa stoṅ pa ñid ces bya baḥi chos kyi rnam graṅs so //
(19)	(*dharmaṃ bhikṣavo deśayiṣya ādau kalyāṇaṃ madhye kalyāṇaṃ paryavasāne kalyāṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ paripūrṇaṃ pariśuddhaṃ paryavadātaṃ brahmacaryaṃ prakāśayiṣye / yad uta paramārthaśūnyatā nāma dharmaparyāyaḥ iti me yad uktam idaṃ tat pratyuktam /)	dge sloṅ thog mar dge ba / bar du dge ba / tha mar dge ba / don bzaṅ po / tshig ḥbru bzaṅ po / ma ḥdres pa / yoṅs su rdsogs pa / yoṅs subyaṅ ba / tshaṅs par spyod pa / yoṅs su gsal bar byed pa / ḥdi ltа ste / don dam pa stoṅ pa ñid ces bya baḥi chos kyi rnam graṅs bśad par byaḥo shes ji skad du bstan pa de rgyas par rab tu bśad do //
(20)	idam avocad bhagavān āttamanasas te bhikṣavo bhagavato bhāṣitam abhyanandan /(*om.)	

無明滅故行滅。行滅故識滅。如是広説。乃至純大苦聚滅。	由是無明滅。即行滅。行滅即識滅。識滅即名色滅。名色滅即六処滅。六処滅即触滅。触滅即受滅。受滅即愛滅。愛滅即取滅。取滅即有滅。有滅即生滅。生滅即老死憂悲苦悩滅。如是即一大苦蘊滅。	無明滅則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則更楽滅。更楽滅則痛滅。痛滅則愛滅。愛滅則受滅。受滅則有滅。有滅則生滅。生滅則死滅。死滅則愁憂苦悩皆悉滅。
		尽除仮号之法。
		耳鼻舌身意法亦復如是。起時則起亦不知来処。滅時則滅亦不知滅処。除其仮号之法。彼仮号法者。此起則起。此滅則滅。
		此六入亦無人造作。
		亦名色六入法。由父母而有胎者亦無因縁而有。此亦仮号。要前有対然後乃有。猶如鑽木求火。以前有対然後火生。火亦不従木出亦不離木。若復有人雙木求火亦不能得。皆由因縁合会然後有火。此六情起病亦復如是。皆由縁会於中起病。此六入起時則起亦不見来。滅時則滅亦不見滅。除其仮号乃法。因由父母合会而有。爾時世尊便説此偈 先当受胞胎　漸漸如凍酥　遂復如息肉　後転如像形 先生頭項頸　転生手足指　支節各各生　髪毛爪歯成 若母飲食時　種種若干類　精気用活命　受胎之原本 形体以成満　諸根不欠漏　由母得出生　受胎苦如是 比丘当知。因縁合会乃有此身耳。又復比丘。一人身中骨有三百六十。毛孔九万九千。脈有五百。筋有五百。虫八万戸。比丘当知。六入之身有如是災変。比丘当念思惟如是之患。誰作此骨。誰合此筋脈。誰造此八万戸虫。爾時彼比丘作是念思惟。便獲二果阿那含若阿羅漢。爾時世尊便説此偈 三百六十骨　在此人身中　古仏之所演　我今亦説之 筋有五百枚　脈数亦如是　虫有八万種　九万九千毛 当観身如是　比丘勤精進　速得羅漢道　往至涅槃界 此法皆空寂　愚者之所貪　智者心歓悦　聞此空法本
比丘。是名第一義空法経。	如是等所説是為勝義空。	是謂比丘。此名第一最空之法。
	諸苾芻。諸有法門如前已説。今此正法汝等当学	与汝等説如来之所説行之法。我今以為起慈哀心我今以辦。常当念修行其法。在閑居之処坐禅思惟勿有懈怠。今不修行後悔無益。此是我之教訓。如是諸比丘当作是学。
仏説此経已。諸比丘聞仏所説歓喜奉行		爾時諸比丘聞仏所説。歓喜奉行

AKUp本は松田氏の校訂テキストを依用した。

これらのテキストの各段について、略説する。

(1)-(4)序分。「勝義空性(paramārthaśūnyatā)」といわれる教説が無問自説として開始される。概して問題はないが、釈尊の説法地は前４者はKuru国とするが、(E)のみ舎衛国とする。

(5)経典の根幹となる一節。「勝義空性」の意味として「眼は生滅する時どこからもやって来ず、どこにも去らない。」と言われる。全テキストほぼ共通の文脈である。

(6)前節から発展して、眼のいわゆる「本無今有」が説かれる。(E)はこれを欠く。

(7)業と異熟に関して、法の仮託(dharmasaṃketa)以外は作者(kāraka)の存在を認めない。文脈からすれば、眼などの六根に対して業果を認めるが作者は認められないことをいっている。(E)は異なり、作者については(16)以下に別立される[5]。

(8)-(9)眼根に関して説かれたことが他の五根にも適用される。(B)には欠け、(E)では(15)で説かれる。

(10)-(13)先に言及された「法の仮託」が説かれる。それぞれ定型句によって、(10)-(11)で「これあればかれあり」及び流転分順観の十二支縁起説が説かれ、(12)-(13)で「これ滅すればかれ滅す」及び還滅分順観の十二支縁起説が説かれ、それらが「法の仮託」といわれる。

(14)-(17)(E)に特有の部分（後述）。

(18)-(20)流通分。それぞれ異なるが、大きな問題はないように思われる。

この経典の要旨はおおまかにいって、Ⅰ.勝義として、眼根乃至は意根（六根）は生じ滅するとき何処からもやって来ず何処にも去らない。したがって六根には、ある蘊から別の蘊に移るような作者は勝義として存在しない。Ⅱ.「これあればかれあり」云々及び十二支縁起の教説は、法の仮託(dharmasaṃ-keta)としていわれる、という２点に尽きる。そして両者は勝義と世俗の二諦の関係にある。

これら５つの『勝義空経』テキストを見て先ず目につくのは、(E)すなわち『増一阿含』本の特異性であろう。

まず『増一阿含』本には(6)の"cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchati/"（眼不実而生生已尽滅）及び、(7)の中の"asti karmāsti vipākaḥ"（有業報）に当たる部分がない。これらの一文は周知のようにそれぞれ経量部と有部の存在論の重要な典拠とされている。したがってこれらの経文の有無は両学派にとって大きな比重を占めるに違いない。現存『増一阿含』の所属部派はいまだ明らかにされていない[6]が、この『勝義空経』のコンテキストからすれば、『増一阿含』は少なくとも有部系の所伝ではないといえよう。

しかし最も顕著な相違は、『増一阿含』本では作者の問題に関しては別立して(16)～(17)に長きにわたって説かれることであろう。この部分は他のどのテキストにも存在しない。

ここでは、眼等の六根は名色のみで主宰者（人造作）は存在しないことが、実例を挙げて詳説される。木を擦って火をおこす場合、木を擦ることによって火が生じるが、木を裂いても火はなく、木から火が出てくるわけではない。しかし火は木を離れてはありえない。因縁によっ

て生ずるのである。同様に人が生まれるときも、父母の交わりという因縁によって受胎し、液状のものから徐々に頭、頸、手足、毛髪、爪、歯などが形作られて人間の形が形成され、母胎から活力を得て産まれ出る。その人間の身体も、多くの骨、筋肉、血管、臓器などからできており、それらを結びつける「個体」は存在しない。すべて因縁和合によって成り立っているのである。このように、生物学的立場からの無我観が述べられ、それが「勝義空（第一最空）」であるとされる。

この『増一阿含』本に独自の部分は他の共通部分と趣きを異にし、一見したところ独立した別の経典のようにも思える。この『増一阿含』本の特異性は、先に述べた所属部派の相違によるものなのか、それとも『雑阿含』本と『増一阿含』本の間に本来的な相違があったのかは明らかでない。

2

次に、この経典は多くの論書に引用されるが、それらがまとまった形で言及されること(7)は少ないので、未報告のものも含めて『勝義空経』を引用する論書ならびに関係論書を整理し、例によって次頁に一覧表にした。断片的な引用ばかりなので、便宜上、先の科段ごとにまとめて引用論書と所在とを示した。但しここに示すのは筆者が知りえた限りのものであり、網羅的なものではない。おそらく他にも引用する論書は多く存在するであろう。なお表中、番号がハイフンで結ばれたものは連続した経文として引用されるものであり、カンマで区切られたものは、別々に引用されるものである。またチベット訳はすべて北京版を使用した(8)。

これについて問題点を列挙する。

1．各論書の引用場面での議論のテーマは、空・縁起・作者の問題・二諦説・過去未来の有無など多岐にわたるが、引用される箇所は(5)-(6)と(7)～(10)に集中している。

2．(5)-(6)は経量部の本無今有説に典拠を与える箇所だが、そのためか多くは過去未来の有無についての議論の場面で見出される。そのほとんどはAKBh以後のもので、いずれも少なからずAKBhの影響下に議論を展開しているようである。

3．(7)-(10)は、"asti karmāsti vipākaḥ"によって有部の実有論に典拠を与える一方、"kārakas tu nopalabhyate"によって、無我を説く通仏教的な教説の典拠となる。しかし "asti karmāsti vipākaḥ"の問題に"dharmasaṃketa"に由来する二諦説が絡んで、その解釈に学派間で相違が見られる。

4．すでに述べたように『増一阿含』本は(6)の"cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchati"と(7)の"asti karmāsti vipākaḥ"を欠いている。ここに挙げた諸論書は大部分がそのいずれかを含むものであり、それを欠いた『増一阿含』本は対応経典として不相応といえる。したがって各論書によって引用され伝承された『勝義空経』とは、AKUpの指示するように(9)『雑阿含』本の形態を指すのであり、『増一阿含』本が予想されうるものはない(10)。

Quot. No.	Code	Title	Chapter & V. No.	Page & Line
(2)-(8)	(イ)	大智度論	釈初品十八空義第48	p. 295a$^{2-5}$
(5)	(ロ)	成実論	無相品20	p. 255a^{28}-b^{1}
(5), (6)	(ハ)	ADV	chap. 5-2 (v. 305)	pp. 266^{5}-268^{16}
(5)-(6)	(ニ)	AKBh	5 Anuśayanirdeśa (v27)	p. 299$^{14-16}$
	(ホ)	VyY	chap. 3	si 103a$^{2-3}$, 111b$^{6-7}$
	(ヘ)	顕宗論	弁随眠品 5	p. 901a^{28}-b^{2}
	(ト)	TSP	chap. 1 (v4)	p. 17$^{17-19}$
	(チ)	TSP	21 Traikālyaparīkṣā (v1851)	p. 631$^{22-23}$
	(リ)	BCAP	9 Prajñāpāramitāpariccheda (v142)	p. 271$^{16-18}$
(5)-(6), (7)	(ヌ)	順正理論	弁随眠品 5	pp. 625c^{27}-626b^{7}
(7)	(ル)	AKBh	9 Pudgalaviniścaya	p. 468$^{22-24}$
	(ヲ)	VyY	chap. 4	si 125b$^{7-8}$, 127b$^{6-7}$
	(ワ)	MSA	18 Bodhipakṣādhikāra (v101)	p. 158$^{20-22}$
	(カ)	MaĀ		sa 156b^{8}-157a^{1}
(7), (10)	(ヨ)	雑心論	択品11	p. 333a$^{18-20}$
	(タ)	順正理論	弁縁起品 3	p. 485a$^{15-17, 19}$
(7)-(10)	(レ)	AKBh	3 Lokanirdeśa (v18)	p. 129$^{9-12}$
	(ソ)	ADV	chap. 5-2(v297)	p. 254^{4}
	(ツ)	BCAP	9 Prajñāpāramitāpariccheda (v73)	p. 223$^{16-19}$
	(ネ)	TSP	chap. 1 (v1)	p. 14$^{10-12}$
	(ナ)	TSP	9 Karmaphalasaṃbandhaparīkṣā (v503)	p. 215$^{17-19}$
(10)-(11)	(ラ)	順正理論	弁縁起品 3	p. 498b^{29}-c^{1}
	(ム)	顕宗論	弁縁起品 3	p. 843a$^{14-16}$
	(ウ)	PrP	1 Pratyayaparīkṣā (v15)	p. 55$^{8-10}$
経典名のみ	(ノ)	成実論	身見品130	p. 316c^{26}
	(オ)	順正理論	弁縁起品 3	p. 480c^{9}, p. 483c^{17}
	(ク)	顕宗論	弁縁起品 3	p. 840a^{13}, p. 841a$^{12-13}$
解釈・複註等	(ヤ)	YBhV 瑜伽論	chap. 3 摂事分契経事処択摂	hi 282b^{1}-283a^{5} p. 826b^{5}-c^{6}
	(マ)	AKV	chap. 3 (v18), chap. 9	p. 283^{7}, p. 707$^{13-16}$
	(ケ)	AKUp	chap. 5 (v27)	thu 19b$^{5-7}$
	(フ)	VyYT	chap. 3, chap. 4	i 144b$^{2-4}$, 155a^{3}, 159b$^{6-7}$
類似文脈	(コ)	法蘊足論	聖諦品10	p. 480c^{21}
	(エ)	雑心論	定品 8	p. 925c^{3}
	(テ)	ŚiS	4 Ātmabhāvapariśuddhipariccheda(v20)	p. 133^{8}

〈略号等〉

AKBh: Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu, ed.by P.Pradhan, Patna,1975
AKV : Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra, ed. by U.Wogihara, Tokyo, 1936
AkUp: Abhidharmakośaṭīkopāyikā-nāma, P.ed. No.5595(tu-thu) (D.ed. No.4094(ju-ñu))
ADV : Abhidharmadīpa with Vibhāṣaprabhāvṛtti, ed.by Padmanabh S.Jaini, Patna, 1977
BCAP: Bodhicaryāvatārapañjikā, ed.by Vaidya (Buddhist Sanskrit Text No.12)
MaÂ : Madhyamakāloka-nāma, P.ed. No.5287(sa) (D.ed. No.3887(sa))
MSA : Mahāyānasūtrālaṃkāla, ed. by Sylvain Levi, Paris 1907 (Rinsen Buddhist Text Series 4, Kyoto 1983)
PrP : Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaired Candrakīrti, ed.by L.de la Vallée Poussin, Paris
TSP : Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntrakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of shri Kamalshīla (Bauddha Bharati Series 1), Varanasi, 1981
VyY : Vyākhyāyukti, P.ed. No.5562(si) (D.ed. No.4061(śi))
VyYT: Vyākhyāyuktiṭīkā, P.ed. No.5570(i) (D.ed. No.4069(si))
YBhV: Yogācārabhūmau Vastusaṃgrahaṇī P.ed No.5540(bi) (D.ed. No.4039(zi))
大智度論: 鳩摩羅什訳大智度論(100巻), 大正25 No.1509
成実論: 鳩摩羅什訳成実論(16巻), 大正32 No.1646
法蘊足論: 玄奘訳阿毘達磨法蘊足論(12巻), 大正26 No.1537
雑心論: 僧伽跋摩等訳雑阿毘曇心論(11巻), 大正28 No.1552
順正理論: 玄奘訳阿毘達磨順正理論(80巻), 大正29 No.1562
顕宗論: 玄奘訳阿毘達磨蔵顕宗論(40巻), 大正29 No.1563
瑜伽論: 玄奘訳瑜伽師地論(100巻), 大正30 NO.1579

〈註〉

(1) 木村泰賢『原始仏教思想論』(旧版全集)p.183,p.186(註9),p.275、山口益・舟橋一哉『倶舎論の原典解明 世間品』pp.151(註1)、霞田宏達「原始仏教における空」(『仏教思想7 空(下)』)pp.428など。なお以下の註も参照。
(2) 宮下晴輝「『倶舎論』における本無今有論の背景ー『勝義空性経』の解釈をめぐってー」(『仏教学セミナー』44)。氏は『倶舎論』三世実有批判に現われる本無今有論、すなわち『勝義空経』の経量部的解釈の起源を『瑜伽論』に帰せられた。一言を加えれば、後述のように(註(8)参照)、『大智度論』の同経の引用・解釈には経量部的要素は見られず、『倶舎論』所説の起源とは見なしえない。そのことからも氏の想定は妥当なものといえる。しかし『成実論』と『倶舎論』の関連も指摘されている(Shoryu Katsura, "Harivarman on Sarvāstivāda" 印仏研26-2)ので、なお一考の余地はある。
(3) 参考までに、三訳の訳出年代を掲げる。(1)AD.435-443(宋元嘉12-20)、(2)AD.397(隆元1)、(3)AD.980(宋太平興国5)。なお後出のAKUpの年代ははっきりしないが、本庄氏によると「シャマタデーヴァは、世親の同時代人や、直後の人ではあり得」ず、両者には時代の隔たりがあるという(本庄良文「シャマタデーヴァの倶舎論註雑録」(『仏教論叢』28)p.104参照)。
(4) 松田和信「縁起にかんする『雑阿含』の三経典」(『仏教研究』14)PP.96-99
(5) (E)の(7)「除仮号法因縁法」はこのままの文脈では(5)の「眼は生滅する時どこからもやって来ず、どこにも去らない」にかかることになり、他のテキストが「作者」について「法の仮託」以外認められないとするのと異なる(意味的には同じだが)。ついでながら、(14)「尽除仮号之法」は(E)のみに見られるが、ここは「仮号之法」として縁起が説かれた直後であるから、(14)の一文が挿入されるのは意味が通らない。「[以上のような]仮号の法は除く」と解釈すべきか。
(6) 静谷正雄「漢訳『増一阿含経』の所属部派」(印仏研22-1)pp.54-59、榎本文雄「阿含経典の成立」(『東洋学術研究』23-1)pp.102-103参照。
(7) 報告例として、本庄良文「シャマタデーヴァの倶舎論註ー随眠品ー」(『南都仏教』49)pp.31-32参照。最も多くの引用文を提供する。cf.L.de la Vallée Poussin, L'Abhidharmakośa de Vasubandhu,2-577,4-59(note3),5-260(note1-2).
(8) 以下、個々の引用文献について、関連論文ならびに気付いた点を記す。
(イ)cf.É.Lamotte,op.cit. pp.316-317.『勝義空経』を引用する論書のうち引用がもっとも長いが、(6)を欠く。つまり、

「本無今有」の部分がない。しかも議論の中で常見を遮するために「無作者」と説き、断見を遮するために「有業有果報」と説くとするなど、中観色の濃い解釈となっている。

(ロ)cf. Shoryu Katsura, op. cit, p. 1059.

(ハ)吉元信行『アビダルマ思想』pp. 143-146参照。

(ニ)秋本勝・本庄良文「倶舎論ー三世実有説(訳註)ー」(『南都仏教』41) p92, p. 102、註(7)の本庄論文参照。

(ホ)宮下晴輝「アビダルマ教義学の一局面ー『倶舎論』から『釈軌論』への展開例ー」(『大谷学報』63-1)p. 16補註1参照。

(ヘ)cf. Stanislaw Schayer, Contributions to the Problem of Time in Indian Philosophy, Krakow, 1938, p. 67. 菅沼晃「寂護の三世実有批判論ーTattvasaṃgraha, Traikālyaparīkṣāー」(『東洋大学大学院紀要』1)p. 101、佐々木現順『仏教における時間論の研究』p. 317参照。

(ト)佐々木前掲書pp. 191-197、田端哲哉「世親と衆賢ー還無と還去ー」(印仏研29-1)pp. 277-281参照。

(チ)桜部建「破我品の研究」(『大谷大学研究年報』12)p. 77、本庄良文「シャマタデーヴァの伝える阿含資料ー破我品ー」(『仏教研究』13)pp. 64-65参照。

(リ)山口益「大乗非仏説論に対する世親の論破ー釈軌論第四章に対する一解題ー」(『山口益仏教学文集 下』)pp. 317-318、松田和信「Vyākhyāyuktiの二諦説ーVasubandhu研究ノート(2)ー」(『印仏研』33-2)pp. 755参照。

(ヌ)江島恵教「Kamalaśīlaの無自性性論証」(『東方学』41)、松下了宗「中観光明論に見られる無自性説批判ー聖教による吟味ー」(『印仏研』35-2)pp. 897-896、同「無自性性と密意趣ー中観光明論に見られる中観派批判の背景ー」(『仏教学研究』43)参照。

(ル)註(2)宮下論文pp. 14-15参照。

(ヲ)山口・舟橋前掲書p. 145, pp. 151註(1)参照。

(ワ)桜部建「アビダルマのともしびー第五章第二節ー」(『大谷学報』52-3)p. 83参照。

(カ)清水公鷹「因果をめぐる論争ーTSP"Karmaphalasambandhaparīkṣā"試訳ー」(『南都仏教』51)p. 13参照。

(ヨ)山口益訳註『月称造中論釈』1 p. 77参照。

(タ)註(2)宮下論文pp. 16-17参照。

(レ)註(8)-(ニ)参照。

(ソ)「何因縁故略説一切五取蘊為苦。謂五取蘊無常転動。労憊羸羸。是失壊法。...本無而有。有已還無。由此因縁略説一切五取蘊為苦。」論旨は有部の立場を離れていないが、五蘊の無常なることを説かんがために「本無今有」を持ち出している。宮下氏のいう「『婆沙論』における本無今有論の周到にして執拗な解釈」の前提はこの論書には見出せない。『法蘊足論』の段階ではこの経文の解釈をめぐっての対立はいまだ表面化していなかったのか。

(ツ)「第一義空者。謂眼起時無所従来。滅時無所至。如是比説。」九種空説の中の「第一義空」の説明。空の分類は、論書によって六種ないし十六種など種々の分類法が与えられるが、多くの場合その中に「勝義空(第一義空)」を含む。しかしこのように『勝義空経』の教説が直接予想されるのは他に例を見ない。

(ネ)"tatra mahārāja ādhyātmikas tejodhātur utpadyate, na kutaścid āgacchati / nirudhyamāno na kvacit saṃnicayaṃ gacchati / iti hy abhūtvā bhavati, bhūtvā ca prativigacchati svabhāvarahitatvāt /" 漢訳によれば、『父子合集経』という長い経典の引用中の一節である(大正32 p. 123a^{3}。サンスクリット原典では経典名は示されない)。

なお『婆沙論』・『瑜伽論』の類似文脈(特に「本無今有」関連)については註(8)-(ホ)宮下論文に詳しい。

(9) 註(8)-(ニ)参照。AKUpの伝える相応阿含は漢訳『雑阿含』と同じく有部系と見られている(本庄良文「シャマタデーヴァの伝える中・相応阿含」(『仏教研究』15)p. 63)。なお、細かなことかもしれないが、『勝義空経』の(7)-(10)を引用する諸論書は、すべて(8)と(9)を欠き(7)と(10)を連続して引く。その点でこれらは『雑阿含』本より、(8)・(9)を欠くAKUp本の方に近いといえる。実際(8)や(9)の引用が見られる論書は『大智度論』のみである。

(10)あえて『増一阿含』本の形態の可能性を指摘すれば、AKBh世間品中の『勝義空経』の引用(レ)である。引用は、中有に関する議論の中、4種の入胎について解説したのにちなんで、有我論(ātmavāda)を主張する外道(bāhyaka)が「有情が他の世界へ赴くと認めるならば、我は成立する。」と論難したのに対して無我の立場からの反証として示されるものである。そして蘊のみ(skandhamātra)の仮説として有情が相続すると説き、業と煩悩による中有の存在と蘊相続の母胎への入胎を認める。そこで次のような経文が引かれる(AKBh p. 130$^{1-4}$)。

kalalaṃ prathamaṃ *bhavati kalalāj jāyate 'rbudaḥ /
arbudāj jāyate peśi peśito jāyate ghanaḥ //
ghanāt praśākhā jāyante keśaromanakhādayaḥ /
indriyāṇi ca rūpīṇi vyañjanāny anupūrvaśaḥ //

初めにカララがあり、カララからアルブダが生ずる。アルブダからペーシーが生ずる。ペーシーからガナが生ずる。ガナからプラシャーカと毛髪・体毛・爪等と物質的感覚器官(有色の諸根)と特徴が順次に生ずる。

(*bhavati: 1975年版ではdhavetiとあるが、初版により訂正。単なる誤植。)
いわゆる胎内五位の次第を示す偈文である。そうして胎内五位から出生までの因縁と、それらが業煩悩によって形成されることが説かれ、三世両重の因果へと論が進む。

本庄目録では、ここに引用される胎内五位の偈文には『雑阿含』第1300経(大正2p.357c^{15}-358a^{7},『別訳雑阿含経』第298経 大正2 p.476b, cf.SN10-1(p.206))があてられている。そこでの対応偈文は

迦羅邏為初　迦羅邏生皰　皰生於肉段　肉段生堅厚
堅厚生肢節　及諸毛髪等　色等諸情根　漸次成形体
因母飲食等　長養彼胎身

である。この偈文は、先に述べた『増一阿含』本に独自の部分である(17)中に見られる偈文(大正2 p.714a$^{12-17}$)

先当受胞胎　漸漸如凍酥　遂復如息肉　後転如橡形
先生頭頂頸　転生手足指　支節各各生　髪毛爪歯成
若母飲食時　種種若干膩　精気用活命　受胎之原本

と類似しており、同一原文(あるいは同一の起源を持つ)と考えられる。

AKBhのこの箇所は、中有説から十二支縁起説へ議論が移行する前段階として、胎生学的見地からの無我＝蘊相続による縁起を説いて十二支縁起説への導入とした部分である。一方、十二支縁起説は『勝義空経』において、勝義空と対置させて世俗の説として説明されるが、『増一阿含』本では同時に胎生学的見地からの無我が説かれる。このことから、AKBhにみられる「(7)-(10)の引用」→「胎内五位の偈文の引用」→「十二支縁起説」と続く論述次第は『増一阿含』本に起源があり、ヴァスバンドゥはここでの議論のヒントを『増一阿含』本の形に近い『勝義空経』から得たと考えることも可能である。

しかし、AKBhの『勝義空経』の引用には『増一阿含』本の形とは異なって"aeti karmāeti vipākaḥ"の一文がある。また『順正理論』の相当箇所((ｹ)にあたる)では、胎内五位への言及はあるものの、偈文は引用されていない。さらにAKUpの指示(tu156a^{8}-b^{7},本庄目録3-35、第1300経相当経典を全文引用する)からも、胎内五位の偈文は『雑阿含』第1300経に対応する。以上の事実は先の想定を指示しない。両者は別々の経典からの引用と見た方が自然であろう。しかしAKBh中に引用されるこれら2つの経文になんらかの関係があるという印象は拭い去れない(『国訳一切経』の註(毘曇部26上 p.55註101)では、胎内五位の偈文の対応経として『雑阿含』1300経と『増一阿含』本の両方が当てられている)。